



成四年度  
③⑧

# 代表作時代小説

日本文藝家協会編



編纂委員

伊藤桂一

尾崎秀樹

綱淵謙錠

武蔵野次郎

村上元三

光風社出版

平成四年度  
代表作時代小説

定価二二〇〇円  
(本体二二六六円)

平成四年五月三十日

発行

編纂者 日本文藝家協会  
発行者 深見兵吉

発行所 光風社出版

東京都文京区春日二一四一一  
振替東京八一二九一三

ISBN4-87519-853-1 C0093

無検印承認

平成三年二月二十四日午後、直木三十五の「生誕一〇〇年」を偲ぶ「南国忌」の法要が横浜市金沢区富岡の長昌寺で行われた。法要後、磯子の横浜プリンスホテルで記念講演会があり、わたくしも指名をいただいていたので、約一時間ほどの講演を行なった。たまたまわたくしが直木三十五（植村宗二）の御令弟に当る植村清二先生（東洋史）から旧制新潟高等学校で教わったという因縁による。

このときの講演の要旨を今年（平成四年）の「南国忌」参列者に配布する「南国忌の会会報」に掲載したいという主催者側の要請があり、「直木三十五と植村清二先生」という題で収録していただいたが、この講演の中でわたくしは直木三十五の文学の研究書の一つとして谷崎潤一郎の「直木君の歴史小説について」（昭8・11—9・1「文藝春秋」）というエッセーを推奨しておいた。

この講演要旨の作成に当り、久し振に谷崎の初期の評論——「芸術一家言」（大9「改造」）や「饒舌録」（昭2「改造」）などを読み返すことになり、その面白さについて夜を徹してしまった。

この「饒舌録」の連載中、自殺直前の芥川龍之介（「文芸的な、余りに文芸的な」と論争し、谷崎は小説における「筋の面白さ」を主張して、「筋の面白さを除外するのは、小説と云ふ形式が持つ特権を捨て、しまふ」ものだと力説、当時の文壇の話題となった。

また谷崎は同書の中で、泉鏡花が自然主義文学派の人々に迫害され、どこの本屋も鏡花の本を出してくれず、ようやくある本屋を見つけて単行本を出そうとすると、その派の人々が徒党を組んでその本屋に抗

議に行くという始末で、出版屋までが手を引く有様だった、という話を紹介しているが、谷崎自身はそのような文壇的な派閥争いから超然として、当時は「通俗小説」として一段低く見られていた中里介山、大佛次郎、直木三十五といった人たちの歴史小説を高く評価し、紅葉、露伴やゲーテ、スタンダールなどと同じ平面で論じている。「お艶殺し」「お才と巳之介」といった江戸市井物から「乱菊物語」「武州公秘話」といった伝奇小説、さらには「盲目物語」「聞書抄」「少将滋幹の母」といった本格的歴史小説を書き遺した谷崎としては当然の発言だったのかもしれないが、現在、もし谷崎が存命中で「春琴抄」を発表したと仮定してみると、これをこの『代表作時代小説』に収録することに世間はなんの違和感も抱かぬであろうし、またそうあつてほしいと念願するものである。小説の醍醐味を求めて、時代は常に前進しているのである。

# 目次

|   |   |   |     |   |   |   |   |   |    |   |   |   |   |
|---|---|---|-----|---|---|---|---|---|----|---|---|---|---|
| う | 春 | 緋 | 秘   | 蓮 | 西 | 天 | 間 | 市 | 束  | 江 | 春 | 番 | 左 |
| さ | の | 寒 | 劍「出 | の |   | 誅 | 男 | 川 | の  | 戸 | の | 町 | 大 |
| ぎ | 出 | 桜 | 撃」  | つ | 施 | 越 | 三 | 門 | 恋  | の | 扇 | 牢 | 臣 |
|   | 来 |   |     | ぼ |   | 後 | 昧 | 太 | ご  | 海 |   | 屋 | の |
|   | 事 |   |     | み |   | 街 |   | 夫 | ころ |   |   | 敷 | 疑 |
|   |   |   |     |   |   | 道 |   |   |    |   |   |   | 惑 |
| 北 | 村 | 安 | 古   | 梅 | 陳 | 早 | 小 | 津 | 南  | 白 | 澤 | 南 | 黒 |
| 原 | 上 | 西 | 川   | 本 | 舜 | 乙 | 松 | 本 | 條  | 石 | 田 | 原 | 岩 |
| 以 | 元 | 篤 | 薫   | 育 | 臣 | 女 | 重 | 陽 | 範  | 一 | ふ | 幹 | 重 |
| 子 | 三 | 子 |     | 子 |   | 貢 | 男 |   | 夫  | 郎 | じ | 雄 | 吾 |
| 二 | 三 | 九 | 五   | 九 | 五 | 三 | 二 | 六 | 三  | 九 | 九 | 三 | 七 |

|          |       |     |
|----------|-------|-----|
| 野ざらし     | 新宮正春  | 二六九 |
| 鬼の眼に涙    | 童門冬二  | 二六七 |
| 因幡の兎     | 伊藤桂一  | 二五五 |
| 能登の流人    | 杉森久英  | 二九  |
| 異本陰徳太平記  | 井口朝生  | 三七  |
| 牛斬り加卜    | 神坂次郎  | 三五  |
| 岩柳       | 戸部新十郎 | 三七三 |
| 薄闇の桜     | 永井路子  | 二九二 |
| 八丁堀の湯屋   | 平岩弓枝  | 四〇七 |
| 大はし夕立ち少女 | 藤沢周平  | 四三  |

装  
幀  
村  
上  
豊

大正十三年二月二十五日 大阪生

「背徳のメス」にて第四十四回直木賞受賞

「天の川の太陽」にて第十四回吉川英治文学賞受賞

主著―「聖徳太子 日と影の王子」

# 左大臣の疑惑

黒  
岩  
重  
吾

西暦六七二年七月二十二日、村国連男依・書首根麻呂らを將軍とする大海人皇子軍は近江の都に攻め込んだ。

皇太子・大友皇子を擁する近江朝軍の武將は必死の抵抗を試みたが、戦意を喪失した兵士達は逃げるのに懸命だった。

近江朝側の猛將智尊を始め、大養連五十君・谷直塩手らの將軍達はことごとく戦死した。

逮捕されたのは左大臣蘇我臣赤兄・右大臣中臣連金・大納言巨勢臣人など近江朝を支えた重臣達である。この辺りにも、重臣達が忠誠心から大友皇子を輔弼したのではなく、権力欲と保身のために皇子に仕えていたことが窺われる。

それにしても戦死した武將達の最期は華々しかった。武將達は数え切れない矢を浴び、刀槍の傷を受けながらも、意識がなくなるまで刀をふるっていたのである。

武將達が壮烈な死をとげたのは、忠誠心というよりも、將軍としての誇りのせいであろう。

二十二日の夜、近江宮に火が放たれ夜空を焦がした。

大友皇子は長等山の峯の上で燃える宮を眺めた。皇子に従っているのは物部連麻呂を長とする十名ばかりの舍人であった。大友皇子が最も信頼している者達ばかりである。

地方の豪族の子弟もおれば、戦死した武將達の子弟もいた。

村国連男依らの軍が瀬田橋を渡り、近江朝軍に総攻撃をかけた際、後方で戦況を見守っていた大友皇子は、物部連麻呂の忠告に従って退却した。

王者は総指揮を執るべきで、兵士と共に戦うべきではない、というのが麻呂の意見だった。大友皇子は、帝王学でも、そのように学んだ。

若い舍人達は刀を抜いて戦いたがった。逃げてばかりいては、武人の名がすたる、と麻呂に喰ってかかる者もいた。

「舍人の使命は主君を守ることだ、おぬしは皇太子を死地に導こうとするのか！」

麻呂は冷静な性格の武人らしくなく大喝して、反抗する舍人を黙らせた。

時に物部連麻呂は三十三歳、大友皇子の舍人達とは十歳ほど年齢が違った。

確かに麻呂の言葉には理が通っていた。熱血溢れる

舍人達も黙らざるを得ない。

だが宮が燃えているのを眺めているうちに、舍人の一人、小子部連千鳥は号泣していたが、何かに憑かれたように立ち上がった。

「皇太子様、お先に！」

と叫ぶと同時に刀を抜き喉に突き刺した。黒い血が闇に飛び、まるで夕立が降り出したような音をたてた。千鳥は二呼吸するほどの間突っ立っていたが、血を吹き出しながら崩れ落ちるように倒れた。

「千鳥、千鳥……」

と数人の舍人が千鳥の遺体を揺さぶる。

千鳥は尾張国司の小子部連鉦鉤の甥だった。伯父の鉦鉤が、時が味方しないことを知り、二万の大軍と共に大海人皇子に投降したことを千鳥は知らなかった。

「皆、千鳥から離れるのじゃ」

と物部連麻呂は落ち着いた声で言った。

舍人達の中には、こういう場合でも冷静さを失わない麻呂に反感を抱く者もいた。

「いいか、千鳥は皇太子様に、お先に、と申した、まるで皇太子様の運命が尽きたような言葉じゃ、吾は皇太子様の命運はまだ尽きていないと信じておる、大海人皇子は正統王朝に対する反乱者だ、皇太子様を擁し、

越に行き、兵を集め、蝦夷の国に入る、そこで力を養い、毛野、武蔵の物部に檄を飛ばし挙兵する、吾はそう考えておる、いいか、正統王朝は、皇太子、大友皇子様側にある、最後まで望みを捨ててはならぬ、それが、皇太子様に対する忠節心じゃ」

蝦夷の国まで行く、といわれ、舍人達は一瞬現実を忘れた。

「それに中臣連金殿の軍勢も、敵の囲みを斬り開き、比良山系を越えて越に入る予定じゃ、だから我々は金殿の軍勢と越で合流する」

この時点において、大友皇子も舍人達も、中臣連金が逮捕されていることは知らなかった。

「麻呂、確かに金は、逃げ場所としては越しかない、と洩らしていたが、越で合流するという計画は出来ていたのか……」

宮が燃え始めて以来、殆ど口を開かなかった大友皇子が、生気を取り戻したような声でいった。

「勿論でございます、だからこそやつかれは実戦の場を避け、皇太子様を山中にお連れしたのです」

麻呂は自信に満ちた声でいった。麻呂がゆつくり鬚をしゃくっているのが、気配で大友皇子には分った。

「何故、朕に隠していた？」

「皇太子様に申せば、額うなずかれるでしようか、皇太子様は、大勢の武將が戦死した今、御自分一人が逃げたりは出来ぬと、越行きを拒否されるでしよう、金殿もそれを案じ、最後まで秘密を保つようやつかれに厳命されていたのです、皇太子様、麻呂の心中をどうか、御理解下さい」

麻呂の声には悲愴感が溢れていた。

感情を余り表わさない麻呂としては、今宵の言動は異常だった。

「そうか、朕の性格から判断し、秘密にしていたのか、流石は智慧者の金と麻呂だ、だが、大海人軍には三尾を押えている羽田公が加わっているようだ、となると湖北から越に入る塩津道も、今津からの若狭道も通れない、この状態では山背に入ることさえ不可能じゃ、どういう方法で越に入る？」

大友皇子は燃えている宮を眺めているうち、敗北感に打ち拉ひがれていた。これまで王者として住んでいた宮が燃え、敵軍に蹂躪じゅうりゃんされているのである。

物部連麻呂が熱弁をふるっている越でさえも、果しなく遠い国に思える。まして蝦夷の国など幻の国のような気がしてならない。麻呂の言葉に一瞬たりとも現実を忘れなかったのは、大友皇子ただ一人であつたか

もしれない。

百濟くだらの沙宅さたくしやうみやう紹明などに帝王学を学んで来ただけに、大友皇子には、客観的に物事を視るだけの理性を僅かだが残していた。

大友皇子の言葉に何人かの舎人が、現実に見覚えた。燃えている宮から北方の闇に顔を向けた者もいたようである。

闇の彼方には三百丈（九百米）級の比良山系が延々と続いているのだ。この暗闇は、巍々ゑいゑとした山々が吐き出す黒い息が集まり幕を張つたように思える。

「方法は考えてあります、たとえ山犬でも比良山系を突き抜け、高島郡に出ることは無理でしょう、そこで我々は今から出来るだけ尾根を登り、今宵中に頂上に近づく、頂上近くで夜明けまで眠ります、日が昇る頃に起きて、適当な隠れ場所を見つけるのです、おそらく敵軍は大津宮の周辺の山を探すでしょう、だが我々を見つけるのは、浜辺に隠された小石を見つけるのと同じでしょう、尾根から離れた隠れ場で籠つておれば、見つけるのは不可能です、幸い我々は五日分の食糧を用意しています、三日あれば、どんなに慎重に進んでも比叡山の尾根に着きます、四日目の夜は山を下り、日が昇るまでに湖に行き、隠してある舟に乗ります」

「舟だと？」

「はい、あの辺りには小魚を獲る海人の舟が無数にあります、こういう時のためにやつかれは湖岸の葦に数艘の舟を隠しておきました、舟にさえ乗れば、夜漕ぐ限り、まず捕まりません、丁度、月のない暗闇です」

「食物は？」

「六日目は空腹を我慢して舟を進め、七日目の夜、舎人のうち二人が舟から降りて食物を得ます」

「つまり農家に押し入り、食糧を強奪するというわけか」

「皇太子様、越で金殿の軍と合流するまで、帝王学はお捨て下さい、王者は勝たねばなりません、唐の国では、挙兵するまで十年ぐらい山に籠っている英雄が幾らでもあります、御存知だとは思いますが……」

岩場に腰を掛けている大友皇子は黙って腕を組んだ。

舎人達は息を呑み、皇子の方を眺めている。旧暦七月二十二日の夜である。淡い月は山中の岩場を照らすだけの光を失っていた。これから月末にかけて月の光は益々弱くなる。

物部連麻呂が説くように、日中は隠れ、夜だけ動けば、近江からの脱出は不可能ではないかもしれない。

何人かの舎人に、脱出への希望が芽生えたようだ。

小子部連千鳥の死が象徴するように、これまでの舎人達は、自分達に生が残されていることなど考えていなかったのだ。

だが総ての舎人が、麻呂の言葉で生を自覚したわけではなかった。

舎人達の中には、小子部連千鳥に続く者もいたのである。

例えば、名門氏族である犬養連音などもその一人であった。

音は近江朝の將軍、犬養連五十君の弟だった。五十君の戦死の報はすでに大友皇子に伝えられている。音は越に向ったという中臣連金の行動を脱走と考えていた。

この現状では越での挙兵など望むべくもない。

將軍達が次々と戦死しているのに、右大臣である金が生命惜しさに逃亡しようとしている、許せない、と音は憤った。

音の同族、<sup>あがた</sup>県犬養連大伴は、大海人皇子の舎人だったから、今頃は近江の都に来ているだろう。大伴は二十代前半で、二十歳になった音と仲が良かった。

音は死ぬのなら近江の都で死にたい、と思った。

「麻呂殿、脱走の計画は御立派だが、到底計画通りに

ことが運ぶとは思ひませぬ、山の中をさ迷ひ、道に迷ひ、獸の餌食になるのは真つ平です、吾は近江の都で死にたい、皇太子様、敵軍の総指揮を執っているのは高市皇子様と聞きました、やつかれは山を下り、かなわぬまでも、高市皇子様の陣に斬り込みとうございませす」

「おう、よくいった、やつかれもだ」

音に應じたように叫んだのは、近江臣堅田であつた。

近江臣は古くから近江に住んでいる豪族である。堅田にとって近江以外に死ぬ場所はない。

「皇太子様、狩人も迷うという比良山の連山を、山に慣れない我々が、どうして進めましょう、深い山に迷ひ込めば進んでいるようで、戻っている場合が多いと聞いています、五日分の食糧はあつという間になくなるのは間違いありません、長の麻呂殿に反抗しているようですが、やつかれは惨めな死に方だけはしたくありません」

犬養連音は血を絞るような声でいった。音は草を掴み、嗚咽を洩らした。

「舎人の使命は主君をお守りすることだ、大事な使命を忘れ、何を申すか、負け戦に血迷つたのか、不忠の舎人は吾が許さぬ、この場で斬る」

物部連麻呂がゆつくり立ち上がった。

犬養連音も同時に立つていた。

「おう、斬るなら斬られるが良い、まるで飢えた獸のように深山を這われる皇太子様を、どうしてお守り出来る、麻呂殿こそ不忠の臣だ」

騒然とした舎人たちを制したのは大友皇子だった。皇子は岩場に坐つたままいった。

「二人共坐るのだ、朕の前で争うとは何事だ、麻呂も麻呂だ、舎人の長でありながら斬るなどと口走るの心が乱れておるからだ、皆の者、鎮まれ」

大友皇子の声は何時もより甲高く暗闇に響く。

「申し訳ありません、ただ今は全員が團結せねばならない大事な時です、危険なのは團結が乱れることです、年齢甲斐もなく、つい頭に血が昇りました、お許し下さい」

麻呂は叩頭すると蹲つた。

音も地に平伏し、大友皇子に無礼を詫びた。秋を告げる虫の声が鳴り始めた。

虫の声は大友皇子の胸に突き刺さり、苛立たせる。こんな刺のある虫の声を耳にしたのは初めてだった。

大友皇子は今、舎人達の氣持が壊れた器の破片のようにならばらになっているのを感じていた。

それは舍人達だけではない。皇子自身がそうであった。

皇子は身体を揺すり腕を組み、夜空を見上げた。もう燃えている宮を見詰める気力はない。

麻呂の脱走計画を聴いた時は、ひよつとすれば助かるかもしれない、と思った。だが音の言葉は望みを打ち砕いた。

頭の中で熱した火が燃えている。胸には暗い穴が開いていた。力が身体から抜けて行くのが自分でも分る。そんな皇子を支えたのは王者としての誇りだけだった。長年学んだ帝王学が、大友皇子に、王者は乱れてはならぬ、と告げていた。

大友皇子は萎えている足で岩を蹴った。何度も蹴っているうちに気持が落ち着いて来た。

大友皇子は気力を振り絞り、地を蹴るようにして立った。

「朕の意見を申す、麻呂が金と謀った脱走計画には理がある、舍人の長としては尤もな策じゃ、だが、音や堅田の言葉にも理がある、心の理じゃ、今の朕には音と堅田の気持を抑えることは出来ぬ、高市皇子の陣に斬り込んだとしても、二人共死ぬだけだ、ただ二人が死ぬことにより朕の名誉は保たれる、それも舍人の忠

節であろう、音や堅田以外にも斬り死にしたい者があれば行け、許す」

次第に大友皇子の声には熱が籠り始めた。

麻呂は何かいいかけたが口を閉じた。音と堅田が号泣した。

「泣くな、早く行け、良い死に場所を得られるよう、念じておるぞ」

大友皇子は励ますように叱咤した。

闇が動き、二人は立ち上がった。

「皇太子様、御無事の脱出を祈り上げます」

「おう、今迄良く仕えてくれた、礼を申す」

二人はまた泣いた。

泣きながら音と堅田は山を下り始めた。二人に釣られたように何人かの舍人が叫んだ。

「皇太子様、やつかれも参ります」

「行け、遅れを取るな」

一人、二人、三人、と大友皇子は去り行く舍人達の数を無意識のうちに数えていた。

犬養連音、近江臣堅田を含め去った舍人は五人だった。

残っているのは麻呂を含めて四人である。物部連麻呂が吐き出すようにいった。

「皇太子様、五名のうち何名が本当に斬り込みますかな」

「麻呂、そんなことは考えぬ方が良い、平時では麻呂の思考力は何時でも光る、だから朕は麻呂を信頼していた、だが今は、明日がどうなるかわからぬ時じゃ」

麻呂に対する大友皇子の声は何時になく厳しい。麻呂は無言で叩頭した。

大友皇子の一行は長等山の山頂近くで一夜を過した。

皇子は神経がたって眠れない。

ものがついて以来の様々な出来事が思い出される。二十数年の歲月だが、思い返してみるとあつという間のような気がする。

ただ亡き父天智帝に寵愛されたことが、このような運命を招いたことだけは確かであった。

卑母が産んだ皇子なら、そのように扱ってくれた方が良かったのだ。

帝王学を学ぶ必要もなかったし、皇太子になることもなかった。権力争いの圏外にいて、自由気儘な皇子生活を満喫出来たであろう。

今は不思議なほど大海人皇子に対する憎悪や憤りは

消えていた。大海人皇子こそ天皇位に即く人物だという気がする。

「父上は年齢を取り、冷静な性格が弱られた、朕は身分の低い皇子のままで良かったのじゃ」

皇子が胸の中で呟いた時、闇の底から這い上がって来るような声がした。

「皇太子様、山麓の方に火が見えます、どうやら敵は長等山に眼をつけた様子、犬養連音らが見つかったのかもしれない」

「そうかもしれないのう」

と皇子はぼんやりと答えた。

麻呂は苛立った声でいった。

「やつかれはそれを心配していました、もしそうだとすると、敵は長等山の搜索に全力をあげます、ここにおれば坐して死を待つのも同じことです、今は丑の正刻(午前二時)頃でしょう、夜が明けるにはまだ間があります、少しでも北に移動致しましょう」

「今から移動か……」

大友皇子は疲れた、と吐息を洩らしそうになった。

越に脱出の計画があつたなら、前もって告げるべきだ、麻呂らしくない、と大友皇子は微かな疑惑を覚えた。だが一瞬の疑惑も疲労感に消された。